試験研究は今　No.928

「内水面実態調査」を始めて 50 年

【はじめに】

当場で毎年出版している事業報告書には、内水面漁業・養殖業の統計に関する記載があり、道内の内水面主要魚種の漁獲量や生産金額の他、ニジマスやヤマベなど養殖魚種の生産量や生産金額がまとめられています。この調査は 1970 年に始まり、2019 年に開始から 50 年が経過しました。平成 5 年までは事業報告書には簡単な記載にとどめ、「北海道の内水面漁業・養殖業実態調査報告書」として詳細を別冊として公表していましたので、今でも関係者間では「内水面実態調査」の名称で呼ばれています。「内水面実態調査」は道内の内水面漁業および養殖業の実態を把握し、内水面振興のための基礎的資料として活用されています。この調査は、実際には 1970 年以前から行われていたようで、当場の書庫には 1965 年の「内水面漁業実態調査書」が残っています。これら資料は単年度ごとの統計となっていますが、半世紀以上に及ぶ資料をつなぎ合わせると北海道の内水面漁業や養殖業の動向が見えてくるはずです。そこで 1965 年～2019 年まで 55 年分の事業報告書や実態調査報告書から漁獲量と生産金額の統計をまとめてみました。

【とりまとめ結果】

① 内水面漁業

内水面魚種の漁獲量統計は 1965 年から拾うことができ、生産金額は 1970 年から把握できました(図 1)。1960 年代に 2,000ｔに達しなかった漁獲量ですが、1970 年代から増え始め 1980 年代は約 5,000ｔ、生産金額 20 億円前後と高位安定でした。しかし、2019 年には生産量が約 1,200ｔと 1960 年代の水準以下になっています。これは 2018 年 9 月

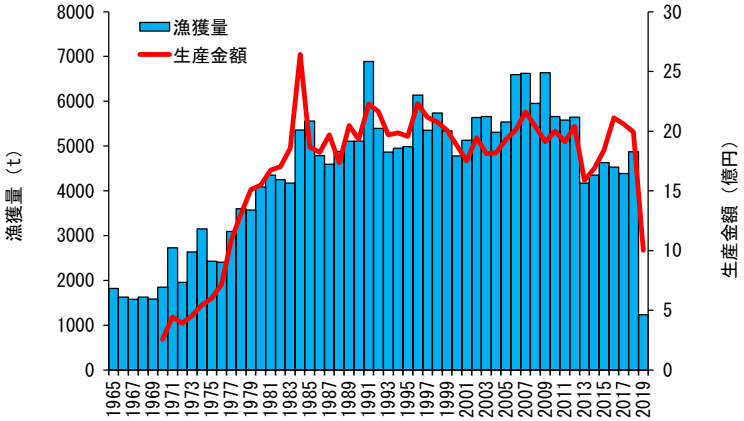

図 1　内水面漁業における漁獲量と生産金額の推移

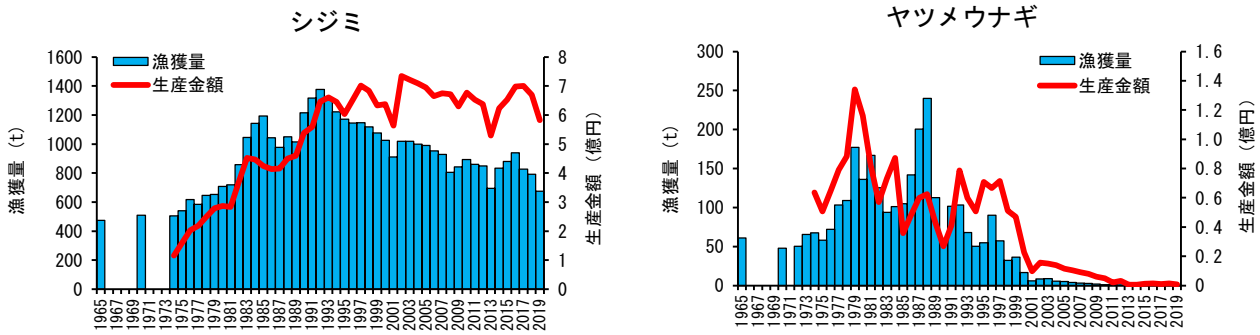

図 2　シジミ（左）とヤツメウナギ（右）の漁獲量と生産金額の推移

に、これまで内水面の扱いであった能取湖が海面に指定され、ホタテガイ等の生産量が内水面に含まれなくなったことが原因です。内水面の魚種であるシジミとヤツメウナギの２種を例に取り、同様のとりまとめをしました（図 2）。シジミの漁獲量は近年減少傾向にあり注視が必要ですが、ヤツメウナギの漁獲量推移を見ると、このままでは北海道内における種の存続自体が危惧されます。

② 養殖業

養殖業の生産量は1966年から拾うことができましたが、1960 年代から1970 年代前半の生産金額は一部を除き欠測していました（図 3）。養殖業の生産量は 1991 年の 1,585t、生産金額は1992 年の 16.6 億円をピークに減少しており、近年は 200ｔ以下の低い生産量が続いています。かつて代表的な養殖魚であったコイと現在も一般的な養殖魚であるニジマスの２種について生産量と生産金額をまとめてみました（図 4）。コイは 1970 年代には重要な養殖種であったことが伺えますが、最近はほとんど養殖されていません。ニジマスはかつて 1,000ｔ以上養殖された時期もありますが、近年は 150t 前後の生産量に落ち込んでいます。1980 年代の養殖魚種にはウナギやティラピアといった魚種も登場していました。近年、回転寿司などでサーモンの需要は高く、海面でのサーモン養殖が各地で行われつつあります。ニジマスのように今は生産量が落ち込んでいる魚種でも、再び脚光を浴びて生産量が増える時代が来るかもしれません。

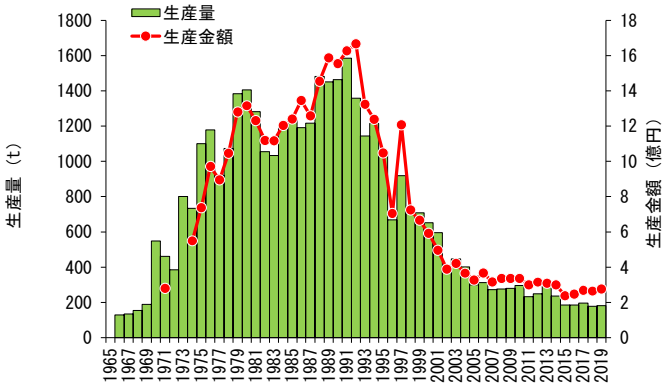

図 3　養殖業における生産量と生産金額の推移

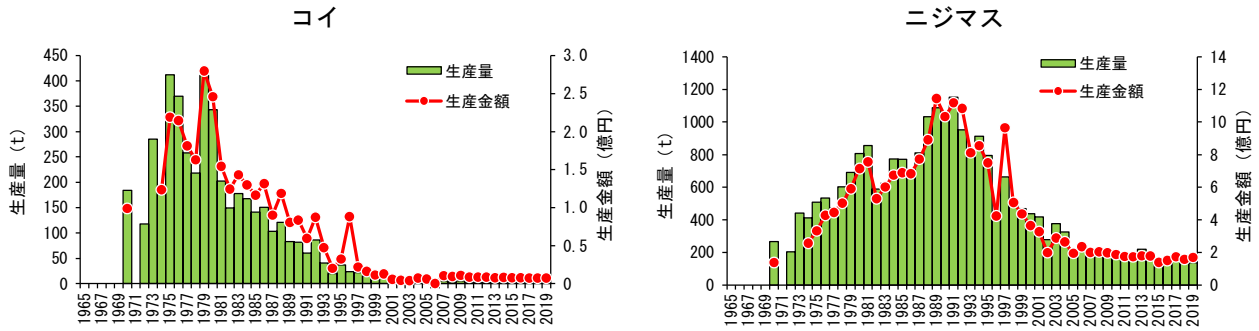

図 4　コイ（左）とニジマス（右）の生産量と生産金額の推移

【おわりに】

「内水面実態調査」が開始されて 50 年以上が経ちましたが、この調査を今後も継続し、内水面の振興策に活用できるようにしていくことが重要と考えます。

（2021 年 4 月 23 日　北海道立総合研究機構　さけます・内水面水産試験場
内水面資源部　安藤　大成）